



鐘 楼 堂



第117号

親 諭

宗祖大師は、阿弥陀仏の四十八願、なかんづくその第十八願の、「至心信樂 欲生我國 乃至十念」という要文中の要文によって、不断念仏を私たちに教えられました。

ここに至心信樂とは、仏様を敬い拝む心構え（真実心）をいいます。また、欲生我國は仏の心を養い浄土を願わんとして善根心を養うことです。そして、乃至十念は南無阿弥陀仏と称えることにほかなりません。このような阿弥陀仏のご本願に添えて、念仏申すことを、ご開山はお勧めになりました。

私たちが朝起きてより、仏前に心静かに十念を唱えるとき、わが身心に仏様の明るい智慧の光が灯されます。その光は、その日の自分と家庭と地域社会を護り、一日を尊いものに運びます。その光を私たちは決して失ったり消したりしないように、聖朝もまた十念を申すべく、そのような日々を重ねることを不断念仏と言います。

総本山では、毎日念仏申す鉦鉦の音が聞こえることは周知の通りです。本山の教を根拠に、ご開山真盛上人が各処に不断念仏をお勧めになってより、間もなく数年の間に十九万回を迎えることになりました。このような歴史を刻む勝縁に遭えることは、今日いのちある者の証であり悦びと言えましょう。

ところで最近、平成天皇がご高齢をお迎えになった故のお言葉がございました。長い昭和の、なかでも良かった時代が懐かしく思い出されると同時に、平成もすでに三〇年近く、高齢化社会を実感する時代となりました。次の世代に、私たちが残してゆかねばならないこと、あるいは残してゆけるものを、よく考えねばなりません。

不断念仏によって、私どもの高い信仰心を今こそ確立し、阿弥陀如来の大慈大悲の心が、家庭と地域社会に、そして我が国と世界にも行き渡って実感できるよくなることを願ひ、そのために私たちはご開山の教えを学び、次の世代に伝えたいと存じます。

総本山の教書第四十三世
大僧正 真譽

お念仏の日暮らし

御親諭をいただいて

宗学寮学頭(布教研修所教監) 森尾 即榮

平成二十九年の新年を、気持ちも新たに迎えられることと、お喜び申し上げます。

西教寺第四十三世真譽上人西村岡紹猥下も九十一歳の新年を、お元気に迎えられましたこと、皆様と共にお慶び申し上げたく存じます。

この度の御親諭(管長猥下のお諭しのおことば)のことも大切なところは、仏さん(阿弥陀さん)の本願を信じて、お念仏の日暮らしをさせていただくことのありがたさを示していただいております。

平成二十八年を振り返ってみても、世界で起きています紛争やテロ、国内での詐欺や人を傷つけ殺めること、そして、地震や台風などの耳を疑うような天災など、驚き胸を痛めるニュースの毎日であったといえるのではないのでしょうか。

そのようななかでも、皆様と皆様のご家族やおつきあいのある方々が、落ち着きのある、安全で楽しい日暮らしを心がけてこられたことは、とても大切なことだと思えます。その皆様の一日一日は、朝仏様と起き、夜仏様と休ませさせていただくという、仏様に護られている、ありがたい日暮らしであるのです。

このことに気づかせていただくことは、私たちが御開山真盛上人との深い御縁を結ぶことができたからであります。とりわけ「無欲清浄専勤念仏」のみ教えに導かれているからです。

このありがたい御縁が、「不断念佛」というお念仏相続として、私たちの真盛宗に、連綿と伝えていただいております。不断念仏相続十九萬日の大きな節目を迎えているのであります。このご勝縁を悦び、老若男女ごぞつて、十返、百返、千返、半日、一日など、それぞれに應じて、お念仏を唱える一時をお持ちいただくことが、管長猥下のお導きであります。

この一年、たくさんの方々とお縁をお持ちになると思っています。どの方との御縁でも、お念仏を唱える心で接して行かれることを管長猥下もお勧めしております。

真盛上人往生伝記 にふれる

第3回 真盛上人の御往生の おすがた

新年明けましておめでとうございませう。昨年の新年号よりはじまった本連載も第三回を迎えました。今回は、真盛上人がまさに往生される瞬間を『真盛上人往生伝記』の記述にもとづいて見ていきたいと思えます。まず、『往生伝記』の現代語訳をご覧ください。真盛上人は「法然のように横になって往生しよう。」とおっしゃって、横になられ休息された。臨終のきわになると病気による苦痛も次第に癒えて、病いによる苦痛は小さく、悩みも少なくなられたのか、最期には姿勢を正し正座合掌して西に向き、持尊（真盛上人がお持ちになつておられた阿弥陀如来像）に向つて「居並ぶ弟子達に」総十念を授け、そののち念佛を数百回唱えられ、眠るように息をひきとられた。さらに息絶えた後も、唇が数百遍動いておられた。

お釈迦様や法然上人は、頭を北に向け、右わきを下にして、涅槃・往生されました。真盛上人もそれにならない、往生を迎えるおつもりで横になられて



真盛上人臨終仏 成願寺蔵 阿弥陀如来像

いたのですが、まさに最期を迎えるその時になって、姿勢を正して合掌されました。そして、いつもお持ちになられていた阿弥陀仏の方を向いて、背にした弟子達に総十念を授けられました。総十念というのは、その場にいる弟子達全てに一度に十念（お念仏を十度となえること）を授けることです。この総十念は現在、管長猥下より私たちに授けられる「お十念」のもとになったものだと考えられます。平時には真盛上人もこんにちと同じように、弟子達の方を向かれて総十念をお授けになられていました。しかし、この往生の瞬間には、弟子達の方を向くのではなく、弟子達を背にして阿弥陀仏の方に向つて合掌され、総十念をお授けにな

られたのです。

これは、ご自分の往生の姿を弟子達に見せ、「相構えて無欲清浄にして能々念佛すべし。」というご自身の最期のお言葉をまさに体現すること、ご往生ののちの弟子達の修行の目標とならんとされたものでありましょう。

本来なら、お釈迦様や法然上人のように横になって往生するところを、弟子達を教え導くために、姿勢を正し合掌されて総十念を授けられ、最期の念仏をとえられたこと、これは真盛上人の限りない慈愛の心の表れであり、この慈愛を受けた弟子達が真盛上人の教えを受けつぎました。その教えが、こんにち私たちにまで戒称二門（戒により身を正し、お念仏に専念すること）の教えとして伝わっているのです。

真盛上人のご往生のおすがたに思いをめぐらせて、命をもいとわぬ慈愛に感謝しながら、私たちも姿勢を正し合掌して、お念仏をさせていただきましょう。

（文責 宗学研究所員 市川直史）

*法然上人は浄土宗の開祖であり、鎌倉時代に比叡山で修業したのち専修念仏をひろめた僧です。真盛上人は念仏をひろめられた先人として、法然上人をお慕いされていらつしやいました。その法然上人と異なつたお姿のご往生を真盛上人が選ばれた点は注目に値します。ただし、この箇所本文は「法然の如く」となっており、「上人」という尊称が無いことは一考を要する点でしょう。

天台真盛宗の雅楽

②

真盛楽所の楽器構成は旋律を奏でる管楽器の鳳笙、箏、横笛、それを補助する弦楽器の琵琶、箏と打楽器の鞆鼓、太鼓、鉦鼓の八種類があり管弦演奏として使われます。

最初に管楽器について案内いたしましょう。鳳笙、天に向かつて十七本の長短の竹が鞆の役目をする吹き口の付いた頭（匏）に円形状に差し並びその容姿が鳳凰の羽ばたく姿に似ている所から鳳笙と言われ管楽器唯一の和音を担当する楽器で、一音だけでなく一度に五〜六音を鳴らす（合竹）が特徴の楽器でハーモニカ、パイプオルガンと仕組みは似ています。

また笙吹きの際には火鉢があります。これは頭に差し込まれた竹の根元に金属製の簧（フリーリード）が付いていて呼吸、吸息で簧を振動させる時に冬場や楽器が冷たい事で息による結露で音色に変化が起らない様に楽器を温める為に有ります。

今回は箏と横笛について案内します。



日本天台三総本山声明公演

「仲秋の名月と天台声明の響き」

大津市には、日本仏教の母山ともいわれる「天台宗総本山比叡山延暦寺」をはじめ、「天台寺門宗総本山三井寺」、「天台真盛宗総本山西教寺」という天台三総本山があります。各寺の歴史、由緒、有する文化財をみても、それぞ



れに関係するところがあり、また三総本山共に「天台葉師の池」と歌われた日本一の雄大な琵琶湖を眼下に望める景勝の地に位置し、静寂の中、四季折々を感じられる自然が、訪れる人々を癒しの世界に誘う共通の環境のもと、一



昨年より大津市観光協会が中心となり、三総本山が協力して当地への誘客のためのイベントを実施しています。

イベントの内容は今のところ「声明」を中心に行っており、同じ天台系統寺院であっても、唱え方はそれぞれ特色があり、延暦寺は魚山の旋律の美しさに聞いたものが涙をすると言われる「泣き節」山岳修験の三井寺は、山中でも声が響くように強く唱え、怒っているように聞こえることから「怒り節」、西教寺は管弦講と呼ばれる、雅楽の伴奏で声明を唱えるという平安時代に行われていた極楽声歌を中心に行っていました。昨二十八年は西教寺が会場となり、九月十四日に本堂で実施され、本宗は仲秋の名月にちなんだ「宴曲月」という曲を、指揮者を中心に声明師、楽人総勢二十数名で奏で、声明と雅楽の合奏ということもあり、特に来場者を魅了しました。

私のしんじん

私は、三重県伊賀市川東の、天照山阿弥陀寺の檀徒で、現在川東に住居しています。阿弥陀寺の入り口には二車

線の広い道路が通っていて、参道は広くて長く、眺めの良い山門の奥に立派な姿で鎮座しているのが我等が阿弥陀寺です。この入り口の県道を日に何度か通りますが、いつも格別な思いで通り、お詣りもしています。

阿弥陀寺は、天保の時代に建立されたと聞いています。現在に至るまで幾星霜も経過し、本堂の屋根も大きく損なわれ、老朽が進んだ時がありました。この本堂の修復をせねばと言う檀家衆の声が高まる中で、修復することがまりました。それは今から二十年程前の、平成六〇七年の事でした。

仮の須弥壇を庫裡に定めて修復に取りかかりました。佛様の遷座の時、御本尊の阿弥陀様を本堂の高い壇からお抱えして、庫裡の仮の須弥壇へお移しました。私が、私は檀家総代の一人でした。お手伝いをいたしました。み佛をお抱きした時の緊張の中で、御佛のぬくもりが私の身全体にじーんと伝わってきて、そのぬくもりが快よく、そのぬくもりに浸りました。

今も尚、そのぬくもりをあたためています。頭初に申しましたように、み佛の慈悲のぬくもりを心の底に銘じながら阿弥陀寺の門前に額づいています。

伊賀教区

阿弥陀寺檀徒 界外貞敏 合掌

平成二十九年 総本山西教寺・宗務所主行事予定

- 一、修正会 一月一日
 - 一、元三大師御祥当法要 一月三日
 - 一、大般若転読会 一月十六日
 - 一、宗祖大師降誕会 一月二十八日
 - 一、節分会 二月三日
 - 一、人形供養法楽 三月三日
 - 一、法華千部会 四月五日～七日
 - 一、大般若転読会 五月十六日
 - 一、寺庭婦人・檀信徒・
婦人団体合同研修会
五月二十七日～二十八日
 - 一、明智光秀公顕彰会法要・総会 六月十四日
 - 一、天台真盛宗宗議会 六・十二月第三週の予定
 - 一、重陽節句会 九月九日
 - 一、大般若転読会 九月十六日
 - 一、別時念仏会九月三十日～十月一日
 - 一、除夜法要 十二月三十一日
- ※行事日程は都合により変更すること
もありますのでご了承ください。



大根煮

一月十五日より二月十四日の約一ヶ月間、食堂にて西教寺秘伝大根煮をご賞味いただくことができます。

大根は、食中毒にかからないということから古来より年の始まりに大根煮を食べるとその一年は病気にならないと言われることから、無病息災を祈り食されたと言われております。

ぜひ、年の始まりに一年の家運隆昌、家内安全、無病息災を総本山のご本尊様にお参りされ秘伝大根煮をご賞味いただくことをおすすめいたします。

大根煮定食 一、三〇〇円(税別)
大根煮 八〇〇円(税別)



ひな御膳・ひな人形展

二月十五日より三月三日まで、食堂に於きまして、『ひな御膳』をご賞味いただいております。

この『ひな御膳』は子供の成長を祈り食していただくお料理でございます。

まず、本堂で息災・健康をお祈りお参りされたあと、表書院で江戸時代から現代までの美術的価値のある人形展をご鑑賞いただき、一日ご家族皆様でお過ごしいただきますようご案内申し上げます。

ひな御膳 二、〇〇〇円(税別)
ひな人形展 五〇〇円(税別)



団体参拝 ありがとうございました

平素は、多数、檀信徒様の総本山への御登山、御参拝を賜り誠にありがとうございました。

今後共、各末寺の御住職、檀信徒様によりよいご参拝がいただけますよう拝観案内等の充実につとめてまいりますので、たくさんの方の御参拝をお待ちしております。

- 六月 十一日 伊勢教区真盛組誕生寺様団体参拝 三十二名
- 九月 二十八日 伊勢教区真盛組成福寺様団体参拝 三十七名

表紙説明

鐘楼堂

鐘楼堂は本堂の東側に建ち、桁行三間・梁間三間の入母屋造で本瓦葺。総檜造の鐘楼は量感に富み、均整のよくとれた袴腰(はかまごし)様式の美しい建造物である。なお、この鐘楼の階上の梵鐘は、古くから明智光秀の坂本城の陣鐘と伝えられており、昭和六十二年二月までは法要・除夜のときに撞かれ、よい音色を響かせていた。

しかし、梵鐘の老朽化を防ぎ、文化財保存の立場から翌年五月に吊り下ろし保存庫に保管、その日に同型同音の新梵鐘が吊りあげられた。

発行所 天台真盛宗教学部

大津市坂本五丁目十三一

総本山西教寺内

電話 大津 (〇七七)五七八〇〇一三番代

印刷所 宮川印刷株式会社

大津市富士見台三十八

電話 (〇七七)五三三二二四一番